

スウェーデンの大学入学者選抜における視覚障害者対応

筑波技術短期大学視覚部一般教育等

加藤 宏

要旨：福祉先進国といわれる北欧スウェーデンの視覚障害者の高等教育と大学入学試験での障害者対応の実状を視察した。本調査ではスウェーデンの視覚障害者に対応した大学選抜方法の適性化と入試における図情報の扱いを中心に調査した。また、スウェーデン国内の各大学における視覚障害者教育の実状視察のためにストックホルム大学の障害学生センターを訪問することができた。さらに、視察の帰路ドイツのカールスルーエ大学の視覚障害学生学習センターも訪問することができたので、こちらの事情も合わせ報告する。

キーワード：視覚障害 大学入試 障害者特別措置 触図 スウェーデン

1. はじめに

われわれ日本人にとって、スウェーデンといえば、ノーベル賞の国か社会保障制度の進んだ北欧の伝統国というイメージがある。そのスウェーデンには盲学校はない。聴覚障害児と精神障害児のための特殊学校はあるが、1970年代から進んだ統合化により、現在盲学校は存在しない。高等教育においても視覚障害者は一般大学に学んでいる。本論文ではスウェーデンにおける大学入試の視覚障害者対応の実態と大学における障害補償について平成13年度科学研究費の海外出張をもとに報告する。

2. スウェーデンと高等教育政策の概略

一体スウェーデンとはどのような国であるか。以下がその概略である。

位置：スカンジナビア半島の東側を占める立憲君主国で北欧最大の国家。

人口：約900万（日本の約14分の1）

面積：45万平方キロ（日本の約1.2倍）

言語：公用語はスウェーデン語、ただし英語教育は小学校2年から。ほとんどの国民は英語を話す。

首都：ストックホルム（人口約75万）

次に高等教育について見てみる。

高等教育進学率：1940年代までは国民の8割が初等教育6年だけで学校教育を終え、高等教育に進学する者は2%に過ぎなかった。しかし、2000年には成人の4分の3がこの年度内にながしかの高等教育プログラムを受講しており、大学進学者も29%に達した。進学率は、1990年代だけで実にそれ以前より60%も増加している。[1], [2], [3], [5]

大学・学生総数：学生総数は32万人（2000年）、年間の新入生は約7万人。大学（university）は国立13大学、私立3大学。第二次世界大戦当時は大学は

UplasaとLundのみでStockholmなどもUniversity Collegeであり、大学ではなかった。Universityとは、博士課程の大学院を持つ総合大学のみを呼称であり、学部の課程しか持たないものや教員養成大学はUniversity Collegeと呼ばれ区別している。ただし、1970年代以降の高等教育リフォーム政策においてHogskolaという新しい概念が導入され、大学・カレッジ・専門大学（institute）を統括する政策が行われている。

なお、スウェーデンでは大学の年限は基本的に日本と同じ4年間であるが、3年で中退する者にも学士（Bachelor）が授与され、4年を修了すれば修士（Master）の学位が授与される。よって大卒の学位は修士となる。

障害学生数：全大学合計で1,545人（2001年）全学生の約0.5%（ただし申告者）。うち視覚障害は134人。[4]

1993/94年度より法律で各大学は予算の0.15%を障害学生の教育のために拠出しなければならないことになった。この予算は、設備や補償機材ではなく、TAや手話通訳・ノートテイカーといった人的補助のための経費にのみ使用できるものである。上記の人数はこの資金からの援助を大学に申請した人数である。よって実際の障害学生数はこれよりも多いと考えられる。また、この比率はupper secondary schoolにおける障害者率の1.4%（4,322/312,936:1998年）よりも少ない。

特殊教育政策により1970年代から統合教育化が進み、視覚障害については現在盲学校は存在しなくなった。聴覚および重複障害については、現在も特殊学校が存在する。盲教育にはそれぞれ盲学校に由来するTomtebodan というリソース・センターと、これとは別に教材やテープを作成するプリンティング・センターが存在する。



写真1 Tomtebodaskolans リソースセンター (Stockholm)

ここはかつて寄宿制の盲学校であったが、現在では障害児、保護者、教師のための短期教育研修・スキル研修・コンサルティングなどを目的とするセンターに改組されている。生徒はとっていない。

3. ストックホルム大学の概略

ストックホルム大学の障害学生センターを訪問したので、ストックホルム大学の概略について以下に述べる。



写真2 Stockholm 大学

1960に University College から大学に昇格。現在学部学生数33,000

大学院学生 2,000

学科数 80、コース 800

障害学生 176 (0.5%)

うち視覚障害 16 (女性12、男性4)

学内には障害学生センターがあり、障害を持った学生のための相談とコンサルティングを行っている。視覚障害学生に対するサービスは主に教授から提出される期末試験問題の点訳作業と障害補償機器についての支援である。センターには全盲の常勤職員が1名いて、点訳作業と学生指導もおこなっている。しかし、視覚障害者用のパソコンの使用法などについては、基本的には Tomteboda 等の施設で大学入学以前に訓練を受けることになっている。

4. スウェーデンの大学選抜制度

スウェーデンの大学選抜制度と視覚障害者特別措置について高等教育庁 (National Agency for the Higher Education, Sweden) の Margaretha Hallgren 女史に話を聞いた。

4.1 大学受験要件

まず、大学入学資格は一般要件と特別要件の2種の要件を満たしていることが求められる。

一般要件は

- (a) upper secondary school の卒業認定 (school leaving certificate) を得ていること。これにはクレジットの90%以上にパスすることが必要。(1996年以前は全科目の履修が必要であった)
- (b) 成人中等学校または民族中等学校の卒業
- (c) 25歳以上で4年以上の就業経験を持つこと

これら (a) から (c) に高卒同程度のスウェーデン語・英語の運用能力をもつことが加味される。留学生には1年間のスウェーデン語研修が要求される。

特別要件とは選抜に当たって個々の大学がまたその専攻分野別に要求する受験資格要件のことである。

4.2 選抜システム

基本的に大学入学試験はないが、定員以上の応募者がある場合には応募者から選抜する。1/3は高校の成績順に採る。次の1/3は適性テスト (SAT) の結果と職業経験の組み合わせによって選抜される。芸術系の大学などではその他の適性テストが課される。この適性テストは1991年以前までは、中等教育を受けていない社会人の大学受験のためのものであったが、今日ではすべての受験生がこれを受けることができる。適性テストでは、結果は素点ではなく2点から0.1点まで0.1点刻みの標準得点として算出され、大学に通知される。これらの管理は国立の大学入試局 (the National Admission Office to Higher Education) が行っている。残り1/3の半数は高校の成績プラスSAT、最後の半数、すなわち約1/6が SAT の得点のみによって選抜されるグループである。

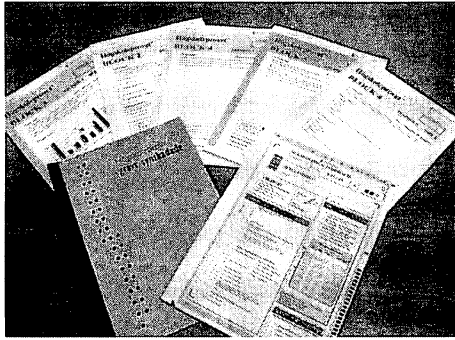


写真3 スウェーデン SAT のサンプル

4.3 SATの視覚障害者特別措置

視覚障害者は統合教育されているので、高校の成績からはどの受験生が視覚に障害を持つ受験生だとは大学は分からない。

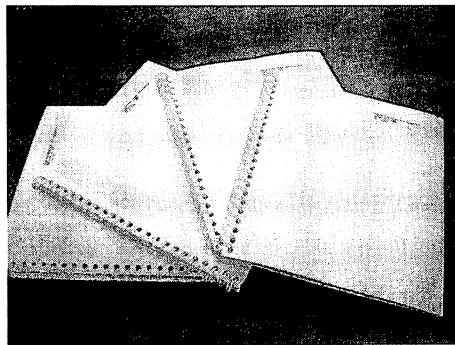


写真4 SAT の点字問題サンプル



写真5 SAT のテープ問題サンプル

適性テスト (SAT) には点字版や拡大版・テープ版などもあるが、大学に知らされるのは標準化された得点のみである。受験生がどの形式で受験したかは大学には分からないようになっている。つまり成績やテストの得点からは視覚障害者であることは大学側には知らされない。日本のセンター試験の成績も点字からマークシートに転記され、結果のみ大学には通知されるので、基本的には日本も同様のシステムによっている。ただし、日本では障害を持った受験生の場合は大学が

事前照会を求めている。よって、視覚に障害を持った受験生が受験する場合は、基本的に大学はその受験生を特定していると考えられる。

5. スウェーデンの大学適性テスト (SAT) の視覚障害者用問題

5.1 SAT受験は必須か

スウェーデンは他のヨーロッパ諸国同様、基本的に大学入試は行っていない。高校の成績が十分に上位であれば、SAT 受験は不要。これは障害者でも同じである。SAT はあくまで卒業試験が芳しくなかった場合のセカンド・チャンスとしてある制度である。SAT は毎年、大学連合の教官スタッフが作っている。点字問題は1995年から作られている。

5.2 問題の質

問題は「1. 語彙」、「2. 数的量的思考力」、「3. 図表グラフの読解」、「4. 英語」、「5. 読解 (スウェーデン語)」。

全盲の受験生には3の「図表読解」は全問免除される。2の「数的量的思考力」についても若干の図表が含まれている場合があるが、図にあらわされた内容の説明や他の問題への傾斜配点処理で代替している。簡単な図でも、点字問題に触図が出題されることはない。

障害者対応として点字問題、テープ問題がある。テープは点字を読めない受験者や年長受験生からの需要がある。今年 (2002年度) から弱視用拡大問題も用意されるとのことである。また、テープは近い将来 DAISY 仕様に替わることになっている。テープの操作は受験生が自分で行う。弱視用の拡大文字問題は原問の A 4 から A 3 への拡大が予定されている。

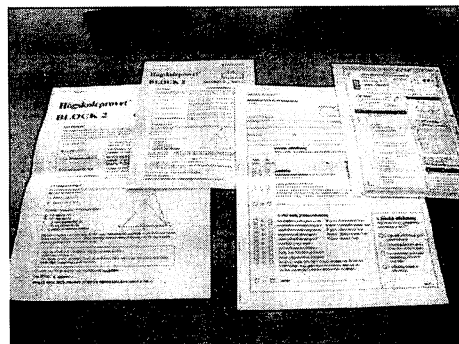


写真6 SAT の弱視用拡大問題サンプルと原問題

5-3 問題の量・解答時間

1科目につき晴眼者50分の試験時間を点字受験は90分に延長 (1.8倍)。基本的に点字受験は1.5倍の時間延

長だが、図表テストを除外するため、合計点が異ならないように他の読解テストなどの設問数を点字受験者には増加させているので1.8倍の時間になっている。1問あたりの時間は1.5倍になっている。弱視は15%時間延長。

5. 4 点字受験生

点字受験 2001年秋 0名

2001年春 3名

毎回受験者は10名以下で通年（年2回実施）で4～6名程度。晴眼者はSATを何度でも受験できるが、点字受験者の受験は2回までに限られている（コストによる制約とのこと）

5. 5 読書障害 (dyslexia) の問題

「我々のキング（スウェーデンは王国）も実は dyslexia なのです。」という Margaretha 氏のことばにもわかるようにアルファベット圏におけるこの dyslexia（読書障害）の概念および出現率の高さは日本人の感覚からは理解しにくいものである。しかし、入試においても dyslexia 対応が重大な問題になってきていることは確かなようである。

Dyslexia 対応としてはじめマルチメディア・テストを試行してみた失敗に終わり、結局、印刷問題を使用し、弱視と同じく15%時間延長で補償する方法に落ち着いたそうである。しかし、Dyslexia についてはこれからの検討課題ということである。

6. スウェーデンでの障害学生への情報保障体制全般について

(1) 情報リテラシー、スキルの訓練は高校レベルまでにやっておくべきであるというスタンスで、大学入学後に情報摂取のために学内で訓練するというコンセプトは基本的にないようである。

Stockholm 大学の障害学生セクションにも全盲の職員が1名いたが、基本的に試験問題の点訳要員であり、学生指導専属のスタッフはいない。機器操作の指導部屋も整備されていない。コンピュータ操作などは大学外で学ぶか入学前に習得するというシステムを採っている。

7 帰路立ち寄ったドイツのカールスルーエ大学では

スウェーデンからの帰路ドイツのカールスルーエ大学に立ち寄り、視覚障害学生学習センターの Joachim Klaus 氏にインタビューすることができた。ドイツでも大学の教育に必要な基本的なコンピュータ・スキル

は入学前にという考え方であった。そのための大学入学前に欧州全体からの障害学生の参加できる ICC (International Computer Camp) 等の制度も用意されている。

カールスルーエ大学では大学の教材や障害補償のためのコンピュータ・システムも見学することができたが、教材における触図からの離脱が印象的であった。視覚障害者向けの数学などの教材にかつては触図を用意したが、学生が実際に利用しないなどの事情により現在では、ほとんど触図は作成せず、図の内容の記述による代替に切り替えているということであった。これにはTeXのようなマークアップ言語の発達でグラフィック情報についても1次元の文字記述が可能になったことも大きいようである。

引用文献

- [1] National Agency for Higher Education: Swedish Higher Education A Survey 1977-2000: ISBN 91-88874-65-6, 2001
- [2] National Agency for Higher Education: Swedish Universities & University Colleges Short Version of Annual Report 2001: ISBN 91-88874-73-7, 2002
- [3] Eurydice Unit, Ministry of Education and Science, Stockholm: Structure of Education, Initial Training and Adult Education Systems in Europe: Sweden 1999, 2000
http://www.mss.edus.si/eurydice/pub/eurydice/sweden_en.pdf
- [4] The Swedish School System and Students with Disabilities 1999, 2000
http://www.sih.se/pdf/school_eng.pdf
- [5] The education system in Sweden, 2001
<http://www.eurydice.org/Eurybase/>

Selection system of admission to universities and special measures for the visually impaired in Sweden

KATOH Hiroshi

Department of General Education, Division for the Visually Impaired, Tsukuba College of Technology

Abstract : We report on the Swedish situation regarding university admission for the visually impaired. In Sweden, there are multiple selection criteria of admission and also some special measures of compensation for disabled applicants. The Swedish SAT (Scholastic Aptitude Test), one of the major criteria (except for grades of upper secondary school) for the blind, include no graphics and statistical tables which are in the original tests of sighted applicants. That is in contrast to the accommodation in the National Center Test for University Admissions in Japan. Graphics in the Center Test are converted tactile graphics and other alternative media. As a rule, in the Center Test graphical information is not taken out. From the point of view of equity and equal opportunities for proceeding to higher education of people with disabilities, we may need to reexamine our admission system in specific areas, e.g., the use of graphics.

Key Words : Swedish SAT, university admission, tactile graphics